

## 立教大学学術推進特別重点資金（立教 S F R）

## 大学院学生研究

## 2018年度研究成果報告書

|                                           |                                                                                             |                                           |         |                                        |     |
|-------------------------------------------|---------------------------------------------------------------------------------------------|-------------------------------------------|---------|----------------------------------------|-----|
| 研究科名                                      | 立教大学大学院                                                                                     | 文学                                        | 研究科     | ドイツ文学                                  | 専攻  |
| 研究代表者<br>(2019年3月現在のものを記入)                | 在籍課程・学年・学生番号                                                                                |                                           | 氏名      |                                        |     |
|                                           | <input type="checkbox"/> 博士前期課程 年<br><input checked="" type="checkbox"/> 博士後期課程 2 年・17PI00F |                                           | 齋藤 萌 印  |                                        |     |
| 指導教員                                      | 所属・職名                                                                                       |                                           | 氏名      |                                        |     |
|                                           | 文学部・教授                                                                                      |                                           | 前田 良三 印 |                                        |     |
| 自然・人文・社会の別                                | 自然                                                                                          | <input checked="" type="checkbox"/> 人文・社会 | 個人・共同の別 | <input checked="" type="checkbox"/> 個人 | 共同名 |
| 研究課題                                      | 世紀転換期ドイツにおける具象的表象形式 — J. ラングベーン『教育者としてのレンブラント』を手掛かりに                                        |                                           |         |                                        |     |
| 研究組織<br>(研究代表者・共同研究者)<br>※2019年3月現在のものを記入 | 在籍研究科・専攻・課程・学年                                                                              |                                           | 氏名      |                                        |     |
|                                           | 文学研究科ドイツ文学専攻博士後期課程 2 年                                                                      |                                           | 齋藤 萌    |                                        |     |
| 研究期間                                      | 2018 年度                                                                                     |                                           |         |                                        |     |
| 研究経費<br>(1円単位)                            | (支出金額) 200,000 円 / (採択金額) 200,000 円                                                         |                                           |         |                                        |     |

## 研究の概要 (200～300字で記入、図・グラフ等は使用しないこと。)

本研究の主題は、1890年に刊行され、従来ナチズムの思想的源泉の一つと見なされてきた A. J. ラングベーン (August Julius Langbehn, 1851-1907) の文化批判的著作『教育者としてのレンブラント』(Rembrandt als Erzieher) 成立と受容の文化史的・思想史的背景を、同書の表象形式に焦点を当てて論究することである。本年度は、同書成立背景の文献学的考証を目的に、1) ドイツでの第一次資料の調査・収集を行い、これら資料を電子データ化することによりデータベースを作成することと、更に、「世紀末のベストセラー」と称される同書の受容の観点の多様さと、それを可能にした同書のレトリックを明らかにするため、2) 1890年から1892年までに発表された『教育者としてのレンブラント』に対する書評を、書評者の関心が同書のどの部分で喚起され、またその言語的発現の仕方を分析するという実証的研究及び3) 同書の再読という3つを軸として研究を遂行した。

## キーワード (研究内容をよく表しているものを3項目以内で記入。)

[ A. J. ラングベーン ] [ 世紀転換期 ] [ 言説分析 ]

## 研究成果の概要（図・グラフ等は使用しないこと。）

本研究全体の目的は、A. J. ラングベーンの著作『教育者としてのレンブラント』受容の様相を、文献学的手法に基づいて、同書において「ナショナル」なものがいかなる形式で表象されているのかという点に着目しながら解明的に示すことである。従来、同書は、ナチズムの思想的・文化的源泉の批判的検証を目的とした F. スターンや G. モッセらによる歴史学研究成果に依拠するかたちで、ドイツだけでなく日本でも専らナチズムの思想的・文化的起源の一つとしてのみ見做されてきた。ナチズムを起点にドイツ民族至上主義的思想の系譜を遡及的に検証するこれら修正主義的な研究に対して、本研究の独自性は、同書が 19 世紀末にベストセラーとなる程の関心と賞賛を獲得した事実に変更して着目し、表象形式とレトリックの観点から同書を精緻に読解することと同時代に発表された書評の分析を柱として、同書成立と受容の言説空間の非単一性を示すことを試みる点にある。

2018 年度は、次の 3 項目、1) 未刊行資料を含む一次資料の調査・収集と欧文二次文献の収集、2) 『教育者としてのレンブラント』の書評分析、そして 3) 『教育者としてのレンブラント』再読を軸に研究を遂行した。以下、順次説明する。

### 1. ラングベーン関連の未刊行資料を含む一次資料の調査・収集

2018 年度は 4 月から 8 月にかけての 5 ヶ月間ボン大学に滞在し、同大学図書館を拠点に欧文二次文献の収集を行った。この期間中、二次文献の調査・収集に並行して、マルバッハ及びハンブルクに出張し、それぞれマルバッハ・ドイツ文学資料館（Deutsches Literatur Archiv Marbach）とハンブルク州立・大学図書館（Staats- und Universitätsbibliothek Hamburg Carl von Ossietzky）にて未刊行資料を含む一次資料の調査と収集を行った。

#### 1.1 マルバッハ・ドイツ文学資料館での調査

マルバッハ・ドイツ文学資料館には 2018 年 7 月 9 日から同月 16 日まで滞在し、主に『教育者としてのレンブラント』の書評及び同時代に公表された関連記事を調査し、収集した。

同資料館はラングベーンの著作と、その生涯にわたる唯一の友人であったモメ・ニッセン（Momme Nissen, 1870-1943）の編集になる図書刊行物のほかに、ラングベーンに関連する資料としては 2 つのファイル「Z: Langbehn, Julius(7f2)」及び「DOK: Langbehn, Julius (7f2)」を所蔵している。前者には 1920/1921 年から 1990 年の間に発表された新聞記事 11 点が収められており、後者には『教育者としてのレンブラント』販売等に関わる 4 つの資料が収められている。そのほか、同資料館のオンライン・カタログをまず手がかりに、ラングベーンおよび『教育者としてのレンブラント』に関する雑誌・新聞記事および関連資料の所蔵状況を調査し、図書資料およびこれに類する資料 19 点、ラジオ原稿 1 点、更に雑誌・新聞記事 24 点を収集した。これらの複写資料は全て電子データ化を行った。雑誌・新聞記事については更に、今後の利用をより簡便にするためにワードデータ化を進めている。

#### 1.2 ハンブルク州立・大学図書館での調査

ハンブルクには 8 月 13 日から同月 23 日にかけて滞在し、ハンブルク州立・大学図書館の手稿閲覧室にて、同館の遺品・自筆稿コレクション（Nachlass- und Autographensammlung）に所蔵されているラングベーン及びニッセンの遺稿を閲覧した。ラングベーンの日記は既に失われているため、これらの遺稿に含まれる、『教育者としてのレンブラント』刊行以前にラングベーンによって書かれた葉書などは、当時のラングベーンの足跡を辿るとともに、ラングベーンが読んだ文献や目を通した美術作品を把握する上で貴重な資料である。これらのうち、本研究にとって重要と思われる資料は電子データ化を依頼した。

### 2. 1890 年から 1892 年までの『教育者としてのレンブラント』受容：書評分析

これまで、合計 14 点の書評を収集、そして分析した。その年代ごとの内訳は 1890 年 11 点、1891 年と 1892 年が 2 点ずつとなっている。現段階では、個別の書評における見解と発表媒体の思想的・政治的立場との間の相関関係を明らかにするには至っていないが、これらの書評の分析を通して、『教育者としてのレンブラント』における叙述の形式的側面

**研究成果の概要 つづき**

に対する見方が同書への賛否を分ける一つの分岐点であることが明らかになった。同書に対して否定的な立場をとる書評では、叙述における学問的厳密性への要求が同書に対する批判に繋がっている。他方、これとは対照的に、同書に好意的な書評の多くは、『教育者としてのレンブラント』の「学問」批判に同調し、非論理的・非体系的であるとして批判の対象となった同書の叙述そのものを肯定的に評価している。同書に対する肯定的な立場がより明らかな書評において、このように非論理的・非体系的叙述を肯定的に捉えていく立場が一層鮮明に現れる傾向にある。

『教育者としてのレンブラント』に対して好意的な書評の中でも特にその傾向が顕著な2つの書評には、『教育者としてのレンブラント』を「告白の書」として捉えるという特徴がある。これらは、それぞれ郷土芸術運動の一翼を担った雑誌『芸術の番人』、東欧への近代文学の導入を旗印にチェコで創刊された文芸雑誌『近代史』で発表された書評である。特に前者は、創刊者であり、自身も郷土芸術運動で中心的な役割を果たした F. アヴェナリウスが執筆者である点で注目に値する。この2つの書評では、「告白」「救済」等の宗教的な語彙が書評者の観点を提示する重要な箇所で使用されているとともに、共同体性の問題が同書の評価に大きく関連していることを明らかにすることができた。

この成果を進捗状況に応じて、東北大学で開催された日本ヘルダー学会 2018 年度秋季研究発表会と東京理科大学で行われた北ヨーロッパ学会の若手下部組織「北欧ネット」の第4回セミナーで順次発表した。

**3. 『教育者としてのレンブラント』再読：「ドイツ」表象の形式とレトリック**

『教育者としてのレンブラント』における「ナショナル」なものの表象形式とレトリックの特徴として重要な点を抜粋して以下に挙げる。同書は「一人のドイツ人」という匿名で出版されているが、ナショナル／民族的な帰属性のみを切り取ったこの匿名は、著者ラングベーンの知的・社会的属性を隠蔽しながら、著者を一介のドイツ人としてのみ提示している。この手続きにより、この著作が「ドイツ人」全体を代弁するものであることを印象付けるとともに、読者をナショナルな／民族的帰属性によって再定義するという、一種排他的な機能をも有していると考察した。同書では加えて、根拠を示さずに主張のみを断定的に提示するという叙述がなされている。ここから推測されるのは、同書の目指すところがある問題についての議論を精緻化することにはなく、このレトリックによって、読者に対して著者の主張についての二者択一的な態度決定が要求されるということだ。このレトリックは、ナショナル／民族的な帰属性を強調した同書の匿名が有する排他的な働きを強化しているだろう。

本項目の内容も含めた本年度の研究全体の成果を立教大学で行われた国際共同研究加速基金（国際共同研究強化（B））「日本近代化における〈国民文化〉と宗教性 ― 学際的・国際的共同研究基盤の強化」第1回ワークショップにて発表した。

**今後の課題と展開**

まず、2018 年度に完了しなかった書評のワードデータ化を今後早急に終える必要がある。次いで、現状では個別の書評の見解と発表媒体の政治的・思想的立場との間の相関関係を解明するに至っていないため、次年度以降、書評者の伝記的背景を綿密に調査することにより、書評者と雑誌媒体の政治的・思想的傾向の関連を分析しつつ、書評者間の社会的・思想的・政治的立場による見解の差異と、その差異が出現する箇所を緻密に分析する作業を行っていくことを計画している。また、以上の2018年度の成果を踏まえ、より発展的な問題設定が可能になった。『教育者としてのレンブラント』及びその受容において、その中心的な主題である「民族」という共同体性の「再生」を語る際に、宗教的・芸術的伝統を踏まえたいかなる文化装置を必要とし、そして利用したのか。この問いをたてることにより、同書成立とその受容を世紀転換期のドイツの精神的・文化的状況により密接に関連づけることが可能になる。この研究成果の一部は2019年8月に北海学園大学で行われるアジア・ゲルマニスト会議で発表（採択済）する予定である。

※この（様式2）に記入の成果の公表を見合わせる必要がある場合は、その理由及び差し控え期間等を記入した調書（A4縦型横書き1枚・自由様式）を添付すること。

**研究発表** (研究によって得られた研究成果を発表した①～④について、該当するものを記入してください。該当するものが多い場合は主要なものを抜粋してください。なお、成果発表を確認できる資料を合わせて提出してください。)

- ①雑誌論文 (著者名、論文標題、雑誌名、巻号、発行年、ページ)
- ②図書 (著者名、出版社、書名、発行年、総ページ数)
- ③シンポジウム・公開講演会等の開催 (会名、開催日、開催場所)
- ④その他 (学会発表、研究報告書の印刷等)

**① 雑誌論文**

該当なし。

**② 図書**

該当なし。

**③ シンポジウム・公開講演会等の開催**

該当なし。

**④ その他 (学会発表、研究報告書の印刷等)**

- ・ 齋藤萌 個人口頭発表, 使用言語: 日本語 (査読あり)  
表題: 「世紀末のベストセラー — A. J. ラングベーン『教育者としてのレンブラント』受容の様相」, 2018年度日本ヘルダー学会秋季研究発表会, 於東北大学川内キャンパス, 2018年11月.
- ・ 齋藤萌 個人口頭発表, 使用言語: 日本語 (査読なし)  
表題: 「A. J. ラングベーンと『教育者としてのレンブラント』受容の様相」, 国際共同研究加速基金 (国際共同研究強化 (B)) 「日本近代化における〈国民文化〉と宗教性 — 学際的・国際的共同研究基盤の強化」 (研究課題/領域番号: 18KK0004, 研究代表者: 前田良三) 第1回ワークショップ, 於立教大学池袋キャンパス, 2019年2月.
- ・ 齋藤萌 個人口頭発表, 使用言語: 日本語 (査読なし)  
表題: 「「民族」と「個人」」, 北ヨーロッパ学会若手下部組織北欧ネット第4回セミナー, 於東京理科大学神楽坂キャンパス, 2018年2月.